

I 次の文を読んで後の質問に答えなさい。

電車の中や喫茶店で次のような光景をよく見かける。日本人サラリーマン三人から四人のグループが一緒に立っている。話をしているのは主に一人。たぶん上司であろう。他のメンバーはあいづちは①盛んに打つが、もっぱら聞き役。これは相互に発話している状態ではなく、一人が話し、残りの人が聞いているという状態で、双方向の会話ではない。

コミュニケーションはことばのキャッチボールであると言われるが、一人が一方的に話し、他は一方的に聞くというのでは相互作用 (interaction) はない。I、私たちの日常には、話し手のみになるとき、聞き手のみになるときのほうが、互いに同じだけ発話する (1) (ようです… ) ときより多い。仕事をしているときは、②指示を与えたり、指示されたり、説明したり、説明を求めたりするが、これらの行動は相互発話の形態をとることはまれである。このような行動も重要なコミュニケーション行動ではあるが、相互発話のコミュニケーションではない。私たちの多くは上下の役割が決まったコミュニケーションには慣れているが、平等な関係でのコミュニケーションにはそれほど慣れていないのではないだろうか。

相互発話は会話の特徴である。相互発話はコミュニケーションに参加している双方の発話が交互に行われるのが前提である。このような形態はどのような条件がそろったときに実現するのか (2) (考えます… ) みよう。一番大切な条件は、双方が平等な関係にあるということである。社会的地位の差、話題に関する知識の差、精神的な依存関係などがあると平等な関係とは言えない。あ、平等な関係では相互会話は困難である。II、双方向の会話は平等な人間関係を前提にしている。

望ましい異文化コミュニケーションは自分と相手との共生共栄と相互尊重のために行う情報交換、情報共有、共通の意味形成行為であるから、一方通行のコミュニケーションは良しとしない。友人、同僚、③しゅみの仲間などでは、心を開いてコミュニケーションができ、理解を得やすいし、満足感もある。ところが、異文化コミュニケーションでは、平等な人間関係は実際にそれほどあるものではない。しかし、だからこそ、異文化コミュニケーションでは、平等でない人間関係でも、い、あたかも平等であるかのように発言の機会を平等に与えようと心掛けることが重要になる。国際的な場ではこれが礼儀になっている。ところで、う、国際的な場で日本人に発話の機会を回して意見を聞こうとしても、なかなか意見を述べて (3) (くれません… ) という不満の声を聞くのは残念である。

相互発話を実現するためには発話の機会が平等に与えられていなければならないが、同時に発話者には相互発話を維持し、意義のあるコミュニケーションに貢献する義務もある。





